94 Neuron specific Enolase (NSE)・RIAキットの基礎的検討と臨床応用

佐藤あけみ，高橋孝子，菊池いづみ，板垣勝義，
榊　徳市（聖医大・放部核）
加藤義郎，近藤義任，辻野大二郎，染谷一彦（同・三内），佐々木康人（群大・核）

血中NSE濃度は神経内分泌細胞由来の腫瘍，また肺小細胞癌などで上昇することが知られ，新しい腫瘍マーカーとして注目されている。今回，NSE・RIAキットSD−8570（ファルマシア社製，塩野義製薬提供）を使用する機会を得たので，その基礎的検討と臨床応用を行った。

測定のWithin assay errorは3.8～7.1％，Between assay errorは6.1～15.0％であり，希釈試験，回収率試験の結果も良好であった。検体の検討では溶血が測定値を上昇させるので注意が必要であった。

正常対照45例の血清中NSE濃度は5.2±1.3μg/ℓであった。臨床検体では肺癌，特に小細胞癌で高値の症例が多くみられた。経過をおえた肺小細胞癌では血清中NSE濃度は臨床経過と一致した動きを示した。NSEは肺小細胞癌などで腫瘍マーカーとして有用といえる。

95 原発性肺癌におけるNeuron Specific Enolase (NSE)の臨床的意義

湯本泰弘，藤井昌史，玉井　守（四国がんセンター内科）

〔対象及び方法〕健常対象100例，原発性肺癌85例，良性肺疾患20例，転移性肺腫瘍4例の計209例である。原発性肺癌の組織型は腺癌35例，扁平上皮癌31例，小細胞癌15例，大細胞癌4例である。臨床病期はⅠ期18例，Ⅱ期6例，Ⅲ期22例，Ⅳ期39例である，良性肺疾患は急性肺炎2例，肺結核2例，慢性気管支炎7例，肺気腫5例および気管支拡張症4例である。転移性肺腫瘍は悪性胸腺腫，甲状腺癌，喉頭癌ならびに肺芽腫が各1例であった。

栄研ICLから供与をうけたNSE　RIAキットを用いた。

〔結果〕血清エノラーゼ濃度の正常範囲は4.5から10.30 ng/mlであり，健常対照の平均±SDは6.81±3.49 ng/mlであった。原発性肺癌の59％で高値を示した。しかし病期Ⅰ期やⅡ期の症例での陽性率が低いことから肺癌の早期診断のマーカーとしては必ずしも適切でなく，病期が進行し，血清エノラーゼ濃度が高値を示す例において治療効果のモニターに有用であった。

---

96 RIAキットによる血中Tissue Polypeptide Antigen(TPA)測定の基礎的検討及び臨床的応用

大塚英司（大和市立病院　内科）

1957年　Bjorklund らにより，腫瘍関連抗原であるTissue Polypeptide Antigen（TPA）の存在が報告された。TPAの測定は主に赤血球凝集阻止反応が利用されてきたが，最近RIAによる測定が確立され，臨床的応用が活発となった。しかしTPAは，腫瘍の起源やそのタイプと関係なく，種々の悪性腫瘍に広く関連する抗原であると言われている。

今回，RIAキットであるProlifigenTPAキット“第一”を用いて，測定をおこなった。その測定法の基礎的検討として，標準曲線，インキュベーション時間および温度の影響，同時再現性と日差再現性，さらに希釈試験と回収試験をおこなった。

臨床的応用のために，健常成人として20才より60才までの男女100名を対象として正常値を検討した。臨床検査上，悪性腫瘍と診断された100名の症例の血中TPA測定をおこない，他の腫瘍マーカーであるCEAとの比較検討をおこなった。これらの症例における悪性腫瘍別の陽性率も検討した。

これらの結果，腫瘍マーカーとしてTPA測定の臨床的意義について報告する。

97 血清ならびに腹水中におけるTissue polypeptide Antigen (TPA) ── 各種消化器疾患における検討

平田和文、遠藤　浩（倉敷中央病院、内）
重康牧夫（同、放）

Tissue polypeptide Antigen (TPA)はBjörklundらにより見い出された癌関連抗原で、各種の悪性腫瘍患者の血中に出現する。今回我々は消化器癌での血清TPAを測定し、その有用性を検討するとともに、特に良性肝疾患での上昇例との鑑別点や、腹水中のTPAについても検討を加えたので報告する。

TPAの測定はprolifigen TPA・RIAキット（第1RI）を用い、2抗体法で行った。健常人50例の血清TPA値は60±18 U/Lであり、100 U/L以上を陽性とした。疾患別の陽性率は胃癌89％(25/28)、大腸癌73％(8/11)、膵癌73％(8/11)、肝細胞癌75％(24/32)、胆管細胞癌100％(3/3)、胆のう癌50％(2/4)であった。良性疾患では肝疾患において偽陽性頻度が高く、血清TPAとGOTおよびGPTとは高い相関を示すことから、肝疾患での評価には十分な注意が必要であると思われた。膵癌ではTPAはCA19−9とほぼ同等の陽性率を示し、両者の組み合わせ検査が有用と思われた。腹水中のTPA値は血清TPA値に比し高値を示すが、癌性腹膜炎症例ではさらに高値を示し注目された。

Presented by Medical*Online